

## 今回のお客様

生涯“千葉商いのち”をつらぬく

**高橋 信美** さん 80歳 2丁目

千葉商まで15キロのドロ道を自転車で通いました。

松波ですか？ “都会の中の都会”、こんな便利なところはありませんよ。

高橋さんは町会活動の大先輩、昨年、副会長を最後に引退しました。「人生でいちばん思い入れのあるのは千葉商」だとおっしゃるので、「どうして？」と聞いてみました。「私は千葉軍吏級村谷当（ちばぐんさらしなむらやとう）という、今で言うと千葉市のはずれ、若葉区谷当町で生まれたんです。家族が通った御成街道沿いの農村でしたが、昭和17年に千葉商に入学しました。合格したのはいいのですが、千葉商までは15キロのドロ道、砂利道です。自転車のドロよげがすぐ詰まって走れなくなる。往生しました」。



ちょうど戦時中ですね。「そうなんです。2年生までは勉強したんですが、3～4年は、千葉商は軍需工場に接収されている末広駐い移転、私たちは日立航空機へ学徒動員でした」。その頃の松波はどんな姿だったんでしょう？「町会前の通りは農道で、あたりは食料増産を目指してムギ畑になっていました。杉並木には鉄道連隊の線路が通っていて、高射砲を積んだ列車が走っていましたし、県営住宅はまだ100本以上の松林の森になっていました」。

戦争が終わって千葉商は松波に戻ってきたんですが、そこで事件が起きます。校長が、これからは飛行機の時代だとして、千葉商を千葉航空工業高校に変更すると言い出したんです。私たち生徒も若かったんですね、校長室に押しかけて“復帰誓願運動”を起こしたわけです。当時、珍しかったようで全国ニュースのもになりましたが、幸い千葉商の存続が決まりました。

武勇伝ですね。卒業後は県庁が良かった？「そうです。県庁生活が37年続きました。昭和32年には、兄弟がいた関係で千葉商の隣りに住むようになって、それから波瀾万丈でした。ガスはもちろん、下水だってまだない状態で、低地の我が家のあたりは大雨が降ると千葉商からも桜並木からも大量の雨が流れ込むんですね。おかげで、いまの京葉銀行めがけて大河になってしまう。当時、トイレはくみ取りだから、県庁からの帰りは人ぶんをかきわけて家に入る騒ぎでした」。それは臭い思いをされました（笑）。



現在の千葉商高正門

千葉商とは縁が切れませんね。「そうなんです。同窓会副会長やら運営委員やらを務めて、最後は校舎の建て替え運営委員長までやりました」。町会でも活躍されましたが・・・。「町会役員は庭仕事をしている時、森宮副会長にくどかれたのがきっかけですが、総務部長や副会長といった裏方の仕事が多かったです」。役員研修では県内の顔の広さを発揮され、県の研究機関などをよくご案内いただいたのが印象的です。最後に松波の印象を？「都会中の都会、こんな便利な街はないというのが一番でしょうか。人は親切ですし、恵まれた土地という印象ですが、それは町会がそれだけ発展してきたということですよ」。そして「それから千葉商は町内唯一の公共機関です。これからも共存共栄を目指してほしいと思います」と付け加えておられました。